

機関番号: 84604

研究種目: 若手研究(B)

研究期間: 2009 ~ 2010

課題番号: 21700852

研究課題名(和文) 人骨に認められる刑罰痕の研究-打ち首・さらし首を例として-

研究課題名(英文) Beheaded and displayed signs on skeletal remains recovered in Japan

研究代表者

橋本裕子(HASHIMOTO HIROKO)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・客員研究員

研究者番号: 90416412

研究成果の概要(和文): 本研究の対象となる「打ち首」や「さらし首」は刑罰史などの文献資料に登場するなかでは比較的多く登場するが、「さらし首」の痕跡が確認できる人骨の出土はこれまで皆無であった。神奈川県逗子市の名越切通遺跡出土した人骨の頭部には孔が穿たれていることが確認でき、孔の形状から和釘を用いたことが予想できた。頭部の孔は、「さらし首」として絵画資料に描かれているものと酷似していただけでなく、絵画資料からは判断できなかった頭部への穿孔方法についても、解明の糸口になる資料であり日本では初めての「さらし首」と推測できる資料を特定できた。

研究成果の概要(英文): This paper introduces a skull with several square shaped fractures. The skull was recovered from Nagoe-Kiritoshi site, Japan (Zushi, Kanagawa Prefecture, about 50 kilometres southwest from Tokyo). The site is a road side area with poor archaeological remains but many periods. The skull was recovered from a layer of early to mid 14 century. The skull was eroded by acid soil and almost only brain case remained with atlas, and several teeth found in anatomical position in matrix. There was no other part recovered. The skull was middle to old age female, according to size of mastoid process and frontal tuberosity, condition of sutures, and degree of dental wear. The skull had four square shaped fractures of about five by five millimetres. One was on the frontal bone, two were on the parietal bones, and one was on the occipital bone. These fractures occurred shortly after her death. The shape, size and position of fractures looked almost exactly like a picture about public display of severed head on late 13 century scrolls. Although there was no clear evidence of her beheaded, circumstantial evidences (i.e. there was no body recovered, the site was a road side area, four square shaped fractures was on typical parts of the skull, her skull nailed shortly after her death) showed that the person was beheaded and displayed in public. This is the first record of beheaded and displayed head in Japan.

交付決定額

(金額単位: 円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野: 総合領域

科研費の分科・細目: 文化財科学・文化財科学

キーワード: 動植物遺体・人骨・骨考古学・打ち首・さらし首

1. 研究開始当初の背景

| 本研究テーマである「人骨に認められる刑

罰痕の研究」は古人骨から傷痕や病変が確認できると判断されてから世界各地で取り組まれている研究課題である。これは先史や古代から近世時代に限らず現代においても注目されている課題のひとつといえよう。

特に日本では、酸性土壌という悪条件により、遺跡出土の人骨に保存状況が極めて悪く、具体的内容は未だに明らかでなく、江戸時代の処刑場跡地出土人骨に認められる後頭部の傷痕から「斬首された」と判断できるだけであった。また、絵画資料から「斬首」「さらし首」といった刑罰の状況、刑罰史などの文献史料から、様々な刑罰が各時代に行われていたといった、間接的な資料が唯一の手がかりであった。直接的な報告では、江戸時代の処刑場跡地遺跡といった刑罰が施工されたと確定されている遺跡出土の人骨に認められる後頭部の刀傷による「打ち首」といった限定された情報しかなかった。また、傷痕が認められても「傷痕が認められる」という記載が行われるのみの報告で、その意味するところまで言及されているところまで至っていない。

本研究課題は、絵画や文字史料でしか確認することができなかった、刑罰について、出土人骨に実証例を提示し、その刑罰が特定の地域や場所で行われたものなのか否かについて多角的に理解する第一歩として大きな役割を果たすと認識している。これは、従来の「分業体制」という殻を破った研究方法であり、刑罰の系譜を明らかにするための新たな切り口につながる可能性を見出すものである。

2. 研究の目的

遺跡出土の人骨からは性別や年齢などの解剖学的な情報が読み取れる。その他にもストレスマーカーという骨に現れる病気や、外的要因による傷痕が読み取れることがある。日本では「打ち首」の出土人骨について報告があるが、いずれの報告も江戸時代のもので、出土地は寺院もしくは処刑場跡地に限られていた。しかし、日本では中世より打ち首、さらし首といった刑罰が絵画や文献から確認できる。近年、江戸時代だけでなく中世の遺跡からも「打ち首」と判断できる人骨の出土が報告されてきた。そこで、本研究では人骨に認められるストレスマーカーである「打ち首」の事例と、打ち首人骨の埋葬方法（出土事例）、更に「さらし首」となった事例を抽出し、そのデータと文献史料との歴史的な同一と差異について実証する。研究対象としている人骨に認められる刑罰痕の研究では、遺跡出土古人骨に残された傷痕から、その人骨に行われたであろう刑罰を特定することを目的としている。これまで遺跡出土人骨の鑑定が行われてきた中で特に「打ち

首」となったと特定できた人骨の個体数が統計分析に耐えうるようになってきた。また、これまで江戸時代でしか確認できなかった、「打ち首」の痕跡が中世の資料からも認められるようになってきた。はじめて刑罰「打ち首」を歴史的に追える人骨が対象資料となったわけである。

3. 研究の方法

本研究課題では日本の絵画や文献史料に認められる刑罰が、遺跡出土の古人骨資料においても確認できるか否かについて明らかにし、また文献に記された時代と出土人骨の年代の際についても明らかにする。

第1に「打ち首」の痕跡が認められる人骨の時代変遷を軸にデータを地域ごとにカウントし分析する。特に江戸時代以前の人骨資料についての資料は近年になって見つかり、副葬品などがある場合はそれらの情報からより詳しい年代を特定する。日本では江戸時代より古い「打ち首」の痕跡を残す人骨は出土が皆無であったので、基礎となる性別や年齢といった形態学的特徴を明確にすることも重要である。これまで申請者が鑑定・報告を行ってきた古人骨資料を出発点とし、関東地域出土の資料を中心に観察・計測を行う。また詳細な報告がない遺跡については、所蔵先と相談した上で報告を行う。その際、資料に病変などが確認できた場合は、国立長寿医療センター研究所の鈴木隆雄博士と意見交換し、病気についても報告を行う。同時に、米国・スミソニアン国立自然史博物館が所蔵する病理人骨資料を観察し、ストレスマーカーについての世界的権威である D. Ortner 博士と情報交換を行う。

第2に刑罰に関する絵画や文献史料と人骨の年代を比較し、同一と差異について明らかにする。同時期の資料については比較研究を行い、出土（埋葬）状態や、人骨そのもの情報（年齢や性別）についても検討する。

4. 研究成果

初年度は、鎌倉時代と室町時代の頭蓋骨に刀傷のあるものについて、関東地方を中心にデータ収集を行った。特に海蝕洞窟や“やぐら”から出土する人骨では、これまで報告書に記載されている以外の刑罰痕跡の有無についても再調査を行った。同時に人骨鑑定依頼のあった全国各地の人骨についても観察を進めた。また打ち首以外の刀傷やこれらの人骨に認められる古病理学的な所見についても併せてデータを収集した。その中で、兵庫県出石町の宮内堀脇遺跡出土人骨（室町時代）は大腿骨に刀傷があり、また別個体の脛骨には骨梅毒に感染しているという症例が認められた。これまで梅毒の症例は日本で最も古い例として、京都の医師の記録が永正 9

年(1512)、山梨の住職の日記が永正10年(1513)にそれぞれあるものの、梅毒に感染した人骨の症例はこれまで江戸時代以降の遺跡からしか発見されていなかった。本遺跡出土人骨は木製位牌などの遺物から室町時代の天文年間(1550年代)と推定されており、現在のところ日本最古の梅毒感染の人骨であることが判明した。本資料の研究成果はイギリス形質人類学会(古病理学セッション)、日本人類学会で報告した。特に日本最古の梅毒の症例となった資料については、2009年11月18日の朝日新聞で紹介された。イギリス形質人類学会ではヨーロッパの中世における打ち首の記録(海外資料)や人骨についてのデータを収集し、担当研究者との意見交換を行った。また古病理学の世界的権威であるアメリカ・スミソニアン博物館のOrtner博士とも梅毒についてだけでなく、病理所見の認められる人骨と刀傷のある人骨が同じ場所から出土したことについて、他地域にも同様な例があるか否かについて意見交換を行った。

次年度は絵画や文献史料と人骨の年代を比較し、同一と差異について明らかにすることを主として行った。神奈川県逗子市に所在する名越切通遺跡は、鎌倉時代に開削されたとされる交通遺跡である。出土した人骨は名越切通周辺部の「まんだら堂やぐら群」第24号やぐら上部から検出された。遺構の層位から、本人骨の年代は、概ね14世紀の前半から中葉と推測される。人骨は、頭骨と環椎の一部のみが保存され、打ち首となった人骨の可能性が推測できた。頭部には4ヶ所、孔が穿たれていることが確認できた。孔は隅丸方形で1辺が4~5mmのものが確認できた。孔の形状から和釘を用いて孔が穿たれたことが予想できた。また、このような頭部は、『平治物語絵詞』において信西の首が獄門の棟木に懸けられる「さらし首」として絵画資料に示されている例に示されている。頭部の孔は、数、大きさ、位置などが絵画資料と酷似してだけでなく、絵画資料からは判断できなかった頭部への穿孔方法についても、解明の糸口になる資料であることが確認できた。本資料が、日本では初めての刑罰「さらし首」と推測できる資料を特定できた。本資料の研究成果はイギリス形質人類学会、日本人類学会で報告した。ヨーロッパでのさらし首は打ち首後に槍先に突き刺してさらすものが主流である。また中世のギロチンでの打ち首では斬首後にその場で髪の毛を手で持ち、その場でさらすのみで、長期間さらされるケースはまれであることが分かった。また、今回の『平治物語絵詞』で見られるような牢獄の門といった建造物に吊るされる形で「さらし首」とされる例はヨーロッパではスコットランド地方に少数例が認められるのみであり、

正解的に見ても非常に貴重な症例であることが確認できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① HASHIMOTO H. & SUZUKI T. 2009.12 “Pathological lesions found in a skeletal remain of Muromachi Period from Miyauchi-Horiwaki Site in Hyogo, Japan” *Anthropological Science* 117-3 p.185 (査読無)
- ② 橋本裕子 2010.3 「スミソニアン博物館のオープンハウス」『考古学研究』56-4 pp.4-7 (査読有)
- ③ HASHIMOTO HIROKO 2010.12 “Beheaded and Displayed head from Nagoe-Kiridoshi Site in Kanagawa, Japan” *Anthropological Science* 118-3 p.210 (査読無)

[学会発表] (計8件)

- ① HIROKO HASHIMOTO 2009.9 “The first physical evidence of syphilis of Japan” 11th Annual Conference of the British Association for Biological Anthropology and Osteoarchaeology, The Bradford University, UK
- ② 橋本裕子・鈴木隆雄 2009.10 「宮内堀脇遺跡出土の室町時代人骨の病変について」第63回日本人類学会、シェーンバッハ・サボ一
- ③ 橋本裕子 2009.12 「縄文時代の通婚圏を考える-三河湾沿岸部を例として-」第10回関西縄文文化研究会研究集会、滋賀県立安土城考古博物館
- ④ 山崎健・橋本裕子・茂原信生・江木直子 2009.12 「京都大学理学部自然人類学研究室所蔵の動物標本-とくに動物遺存体と動物化石について-」第13回動物考古学研究集会、ミュージアムパーク 茨城県自然博物館
- ⑤ 橋本裕子 2010.4 「歯の観察から縄文時代の通婚圏を考える」考古学研究会第56回研究集会、岡山大学 (査読有)
- ⑥ 橋本裕子 2010.5 「古代からのメッセージ：遺跡出土人骨から様々なことを読み取ろう」NPO 法人科学カフェ、京都大学 (招待講演)
- ⑦ HIROKO HASHIMOTO 2010.9 “A skull recovered from 14 century site in East Japan” 12th Annual Conference of the British Association for Biological Anthropology and Osteoarchaeology, The University of Cambridge, UK
- ⑧ 橋本裕子 2010.10 「名越切通遺跡出土人骨

の打ち首・さらし首人骨」第 64 回日本人
類学会、北海道 だて歴史の杜カルチャー
センター

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本裕子 (HASHIMOTO HIROKO)
独立行政法人国立文化財機構 奈良文化
財研究所・埋蔵文化財センター・客員研究
員
研究者番号：90416412

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし